

第46回日本保育学会報告 III

子どもが「見える」ところ

内なる世界を探る

藤田 博子

企画・司会者 下山田裕彦（静岡大学）

話題提供者 津守 房江（愛育養護学校家庭指導

グループ）

黒川 建一（愛知教育大学）

藤田 博子（浪速短期大学）

東 義也（一番町保育園）

指定討論者 渡辺 保博（三重大学）

子どもと接する日々の保育の中で、私たちは子どもの心の奥に隠されている微妙な動き……苦しみ・悲しみ・悔しさ等……を本当に理解しているのであるか。おと

なの一方的な願い・要求・意図等をたびたび押しつけていないだろうか。

子どもはおとなの力の前に弱く、無力である。にもかかわらず、子どもの主人公は子どもである。

保育の営みの中で、子どもたちが本当に「見える」とき、私たちは子どもの心の動きを見ている、と言ってもよいだろう、つまり、子どもの姿を真の全体像の中で見るとき、子どもは旧態依然たる保育から解放されるだろう。このような願いをこめて自主シンポジウムを開きたいと思う。会員との真摯な討論を通して、このやっかいな、しかし、緊急の課題に立ち向かっていきたい。

一九九三年五月十六日、日本保育学会第四十六回大会において、下山田裕彦（静岡大学）の企画によって行われた、自主シンポジウムは、予想を上回る会員の皆さんの参加を得、共通講義棟の特Ⅱ教室は追加の椅子の搬入も及ばず、参加者は廊下、そして窓の外の芝生にまで満ち溢れた。

まず、下山田裕彦によって、先に掲げた問題提起がなされ、同氏の司会により始められた。その後、藤田博子（浪速短期大学）が幼児教育者養成大学の立場から、続いて、東義也（二番町保育園）が保育実践者の立場から、黒川建一（愛知教育大学）が教育者養成大学の立場から、津守房江（愛育養護学校家庭指導グループ）が、養護学校の幼児のグループでの実践の立場から、それぞれに話題提供し、最後に渡辺保博（三重大学）の討論で締め括られた。その要約はおおよそ次のようであった。

藤田博子の提言

子どもが「見える」ということは、私たちが子どもを保育し、援助していくうえにおいて、とても大切なこと

だと思っています。ところで、私たちが、目の前にいる姿ねられた子どもが見えるということは、一体どのようなことを意味するのでしょうか。

一個の人格としての人間は、過去を含んだ現在の生活を生きている存在です。こうした人間の内面における「異時間重存在」を思いみますとき、子どもは、程度の差こそあれ、順応したり抗ったりしながら、それぞれに彼自身の生活のなかで起こった事柄と深く関与し、一個の人格としての歴史を生きている存在であることに気づくはずで、す。いわゆる、子どものこれまでの生い立ちが、現在の彼に、癒し難い痛手を負わせてしまっているかもしれないし、あるいは、素晴らしい影響を及ぼしているかもしれないのです。子どもが見えるということとは、その一人ひとりの子どもと人格的な交わりを結び、彼らの「人間存在」の歴史にふれることなくしては不可能なことではないでしょうか。すなわち、子ども一人ひとりの「人間存在」の歴史のなかで、今、子どもが渡ろうとしている「内なる河」を認識してあげることではないでしょうか。

しかし、そうはいっても、「人」は、それぞれ独自の人格をもつがゆえに、一般的な範疇からは捉え得べくもありません。同じ生活歴、同じ人格構造、同じ過去・現在・未来の関わり方をもっている子どもは二人とはいえないのですから、私たちが、保育者として、子どもが見えるための経験を積むには、それぞれ異なる子どもたちとの多様な交わり、次々に生じる新たな課題、はからずも直面する様々な障碍などを、自らの全人格的な力を投入して克服し、やり遂げていかなければならないのです。

このようにして、私たち自身の人格の「統合」も、その都度改められ、是正されて、より豊かに成長してゆかなければならないのです。そのためには、常に、保育という営み、あるいは子どもへのまなざしや関わり方を反省し、変容することが必要だと思ふのです。いわゆる、何が先入観であり、何が硬直したセオリーであるかを見極め排除しなければならぬのではないのでしょうか。

例えば

日常子どもを自己の感情や経験からとかく類型的に固定化してとらえていないだろうか？

学問的知見や、経験的知見を安易に技術化し、個々の子どもを無視したパターン化された指導に陥っていないだろうか？

過剰な指導意識が、子どもの応答の底に隠された真の意味を見失わせていないだろうか？ など

それでも、私たちは、本当に私たちに与えられた、すべての子どもが見えるのでしょうか。子どもが見えるという自己過信こそ、保育するものにとっては、恐ろしい陥穽かも知れません。それゆえ、子どもが見えるという自己過信の前に、私たちは、「子どもは見えない」という、自分の限界にも気付く必要があるのではないのでしょうか。

メルロ＝ポンティは「見るとは常に、実際に見える以上のものを見る（見えないものまで見る）ことだ。私が見ているのは、直接目に触れる彼の身体ではなく、まさに彼の体験そのものである。彼が自分の体験を、どういう意味関連に組み入れているかを問うことが、私が彼を理解するということの意味である。他者理解はすべて理解

する者の自己解釈の作用に基礎づけられている〔私が他者の体験に意味を付与する〕とはこのことである。』と書いています。また、マックス・シェラーは「愛は精神の目を見えるようにする」といつているところを見ますと、メルローポンティの「見えないものまでも見る」といつ見えるということの神髄に達するためには、愛情の介入が不可欠な要素であるといえましょう。他者の体験に意味を付与するという、この厳肅な行為は、豊かな愛のまなざしのなかでこそ達成されるものなのです。ですから、子どもを一人ひとり独自の人格として理解し、子どもが見えるということをお願いする保育者にとっては、文学、芸術などを通して、自分自身に向けて目を豊かにすることとともに、先ず以て必須の要件は、真摯な自己批判と積極果敢な自己更新でなければならないと思うのです。保育者は、個々の子どもとの人格的交わりを通じて、より高い人間の価値の創造を目指して共に歩みゆくことを、自らの基本課題とし、絶大な信頼をもって子どもたちに援助の手を差し伸べなければならないと思うのです。人が人を教えるという営為は、まことに畏ろし

い厳肅な営みです。私たちは、その畏ろしき、そのことの厳肅さの前に肅然と頭を垂れ、唯々身も心も畏れおのかなければならないのではないのでしょうか。他者の人間形成に、他者の自らの内面に人間的諸価値を創り出し、その人ならではの独自の人格形成していく道程に、私という別の人間が深く関与することの、途方もなく重大な責任を、私たちは常に自覚しなければならぬのです。こうした謙虚にして厳肅な自覚こそ、子どもが「見える」ことへの原点ではないのでしょうか。

ここで、強要される保育者の謙虚さと、忍耐と注意深さ、これらは保育者自身の、人間の真理に対する深く強い愛と畏敬の念を根底としたことがらなのです。

このことを、私たちは常に自覚しなければならぬのではないのでしょうか。

東義也の提言

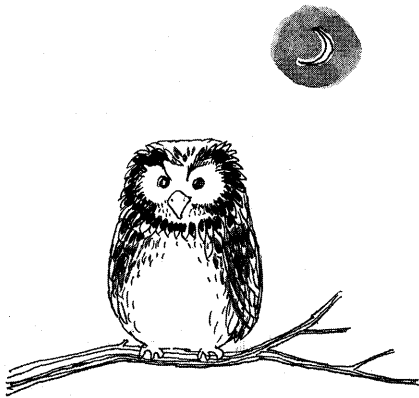
子どもが「見える」ということは、どういうことなのか。これは、見る側としての保育者の姿勢と在り方が問題となっています。いわゆる、子どもを見

るおとなの眼、そして、考え方に焦点が当たっているのです。

「みる」といっても、様々な用語があります。英語では、see, look, watch, 日本語では「見る」「視る」「観る」などです。このなかでも、watch, 「観る」は多面的に念を入れて、覆われているものまで詳しく見分けるという意味です。この観の熟語「観察」が、いろんな角度から、相当対象へ食い込んで見るという意味をもって、いることを考えれば、「見る」より一層努力があるので、はないでしょうか。

論語に「子曰く 其の以す所を視、其の由る所を観、其の安ずる所を察すれば、人いづくんぞかくさんや、人いづくんぞかくさんや」とありますが、その人の行動を観察し、その動機を観察し、その目的とするところを観察していけば、その人間の真実は、覆うところなく現れる、という意味です。人を見る目が訓練されていけば、最終的には人の心の内面が見えてくる、ということなのでしょう。しかし、それで、すべてが見えるということでは決してありません。どうしたって見えない部分はあるのです。

聖書にはこんな言葉があります。「あなたがたは確かに聞きはするが、決して悟らない。確かに見てはいるが、決してわからない」と。この聖句を思い見ますと、私は、フレibelは実に分かりやすい物を創ってくれたと思うのです。たとえば、この恩物の「立方体」です。この立方体は、真つ正直に真向かって置いて、視線を動かさなければ、私たちは一面しか見ることができません。しかし、少し目の位置を動かすと二つの面が同時に見えるようになります。さらに動かすと三面



が同時に見えます。しかし、この立方体は本当は六つの面をもっているのです。けれども私たちは六つの面を同時に見ることは出来ません。裏側に隠されているのですから。

実際の保育において、子どもを「見る」ということも、彼らが現実に見せてくれる行為を、隠れて見えないけれどもそこに内在しているものがあるんだという、そのことも含めて考える必要があると思うのです。ですから、保育とはとても難しいものだと思うのです。

神谷美恵子氏は著書『存在の重み』の中で、「現実を見詰めるとき、一歩しりぞいて静かに、こまやかな感受性を働かせて、いろいろな角度から考えてみる。そうすると、いわゆる現実をはるかにはみ出した大きな心の世界がひらけてきます。これこそ、一層大切な現実で、いつまでも私たちをはつらつとさせてくれる驚きや夢はこの心の世界から湧き出てきます」と述べています。

保育も同じではないでしょうか。私たちが子どもたちの目に見える行動だけに固執せずに、見えない部分の存在を認め、その世界を垣間見る努力をし、心のひだに触

れることが出来たならば、もっと大切な、或いは本質的なものが見えてくるのではないのでしょうか。このようにして、保育の場にあつて子どもの内なるものに共感できるとき、それは、私たちを一層潑刺とさせてくれます。

したがって、「子どもが見える」ということは、「彼らの大きな心の見えない世界に共感できることである」といつてもよいでしょう。

子どもたちの「目が輝いている」とか「生き生きしている」とか「のびのびしている」といえるときというのは、保育者自身もそのような雰囲気の中にいるときです。そのために、保育者自らの感受性や創造力を広く深く耕し養うことが大切なのです。保育とか教育とは、まさに自己の訓練を実践、継続することに他ならないのです。

津守房江の提言

なぜ、おとなは、子どもが「見える」ことを希求するのでしょうか。このことを私たちは自問して見る必要があると思うのです。なぜなら、どんなおとなにとって

も、子どもの内面が見える時もあり、見えない時もあるのです。それでも、見えないまま、子どもをゆったりと受けとめ、豊かな時を経験することも現実には、可能なのですから、「見える」ことが保育の必要条件ではないのです。それなのに、おとなは見えることをのぞみ、なぜ、子どもの内面に目を向けるのでしょうか。そのことを実際の保育の場面から考えてみますと、……

見えないまま豊かな時を過ごすうちに、何ヶ月かすぎると子どもに変化が出て来ます。はじめは、無表情で保育者から離れていき、保育者には人間関係が育たない子どもと見えていたのが、保育者が子どもが見えないなりに、子どもを決して否定的に見ること無く、常に自らを立て直し肯定的に受けとめようとする、いわゆる、アンビヴァレンツな揺れと、それを立て直す努力の中で、関係の危機を乗り越えた時、やっと、子どもの心が「見え」、愛が生まれてくるという場合もあります。その過程に一年の歳月を費やすことだっているのです。

もし、子どもが「見えない」ことが、理解できないことと同義として、子どもを否定する気持ちと結びつくな

らば、そこには愛ではなく、拒否や嫌悪感が生まれることになりましょう。この場合、「見えない」ことが危機なのではなくて、「見える」ことばかり希求しながら、真に受容しようとしないうとな心の心に、危機が潜んでいるといえるかも知れないのです。ですから、子どもが「見える」ということばかり希求する、おとなの心を、いま一度問い直して見る必要だっているのです。

いつの時代にも、母親はわが子を解らないまま、全くもって未知のまま受け取らなかつたでしょう。見えないまま、その子をそのまま受け容れ、未来についてもそれほど不安を持たず、ごく自然な豊かな関係の中で、わが子を受容し、その子どもの成長に関与してこなかつたでしょう。

しかし、ことが、保育者と子どもという関係になると、見えないまま、理解出来ないまま、子どもを受容し、それを持ちこたえることは困難なことかもしれせん。確かに、子どもの内面に目を向けることで、理解が生まれ、ひとしおの愛しさも生まれ、関係の危機を脱するものであることは、言うにおよばないことなのですか

ら。

それでは、子どもが「見える」ためにはどうしたらいいのでしょうか。それは、保育者が常に、何が子どもの心の中に起こっているのだろうかという、探求心を大切にするのではないのでしょうか。そして、保育の経験の中で体の感覚で覚えたことを大切に保存し、子どもの行動や反応と照らして考える手立てにすることなのです。

この場合、子どもの行動や反応の意味が分からなくても、なげ捨てずに考え続けることです。保育者自身が子どもだった時のことも含めて考えながら。このように、

保育者が見えることを希求し、いつでも自分と相手とに関心を持ち続ける時、愛の関係は生まれてくるように思うのです。その中でこそ、子どもは自分自身の成長にもなう危機感や、成長の喜びを素直に表現しつつ、新しい自我を創ることができると思うのです。こうした中で、子どもの内面を発見するということは、もう、魂において悟るといっても決して過言ではないほど、透徹した子ども理解に直結しているのです。すなわち、真に子どもが「見える」ということなのではないでしょう

か。

こうした、次元で子どもが「見える」ようになるためには、保育の道における真摯な研鑽も大切ですが、文学、芸術などを通して、自分自身に向ける目を豊かにすることも重要なことでありましょう。文学を味わい、読み取る。芸術を理解するということは、子どもを理解し、子どもの内面を読み取るという、子どもが「見える」ための感受性の陶冶とどこかで繋がっているものなのですから。

* この原稿は、日本保育学会第四十六回大会（五月十六日）

福岡教育大学に於いて開かれた、自主シンポジウム「子どもが見えるということ」内なる世界を探る」での提言を藤田博子が加筆、訂正して纏めたものです。

（浪速短期大学）